

運動器理学療法のパラダイムシフト—新たなる可能性への挑戦—

2 運動器理学療法のパラダイムシフト ～新たなる可能性への挑戦～

有限会社 セラ・ラボ 山口 光國

運動器理学療法の歴史を、簡単に表すとしたら、主観から客観へ、経験的対応から科学的対応へとと言えるのではないのでしょうか。

しかし、運動器理学療法の役割は変わることはありません。人は生まれたら、必ず死を迎えます。この唯一とも言える真理からすると、人は永遠に保持される機能は存在しません。

それは誰もが理解していることであり、最終的には、苦しみから逃れたいと言うことにつながる人が多いのではないのでしょうか。そのためにも、望む機能が再獲得できるのであれば、改善が望ましく、しかし、改善が望めないのであれば維持が好ましく、失われてしまったものについては受容と代用が必要となります。

運動器理学療法は、まずこの判断が重要となり、また時に、失われてしまった機能と維持が望ましい機能と、改善が見込まれる機能が混在することもあります。

客観的に、科学的に判断することは、非常に重要ですが、判断は、単に確率論を押しつけてしまうものではありません。確率論の多

くの場合は、正しさについては言及できないため、そのまま対応へと反映させて良いというものではありません。

ましてや、基準となる数値は、あくまでも参考であり、その値だけで良し悪しを決定したり、すべき対応が決定されるとは限りません。

これまで私達は、的確な評価を明らかにし、理にかなった技術を導き出してきました。これからも、この素晴らしい流れは続けられるべきであり期待されるものであると考えます。

しかしながら最終的には、確率論から何をさせるのかではなく、今の状態を踏まえ自身の役割を明確にし、症例の本来あるべき姿へ誘うために必要なことを見出す、総合的判断力が重要となるのではないのでしょうか。知識、技術ももちろん大切ですが、今回は、これからの運動器理学療法をより発展させるためにも、この総合的判断力に焦点をあて、皆さんと考えてみたいと思います。

運動器理学療法のパラダイムシフト—新たなる可能性への挑戦—

3 運動学・運動力学的視点から捉えた理学療法の再考

回生病院関節外科センター附属理学療法部 山田 英司

理学療法はサイエンス（科学）とアート（定性部分）の融合であり、質の高い理学療法を提供するためには、両者のバランスが重要である。質が保証された理学療法を行うために、理学療法士は最良のエビデンスを用い、治療にあたる必要がある。例えば、国内に約2,500万人と推計される変形性膝関節症に対する治療ガイドラインもいくつか報告されているが、変形性膝関節症という大きなカテゴリーで捉えたガイドラインでは、様々な病態や臨床症状を呈する個々の患者に対応することが困難である場合が多い。すなわち、変形性膝関節症という1つの疾患名のカテゴリーから出されたエビデンスのみでは、臨床における個別性に対応しにくいということである。今後、変形性膝関節症を病態や臨床症状、あるいは運動学・運動力学的に特徴づけたサブカテゴリーに分類し、エビ

デンスを構築していくことが重要である。運動器疾患において、理学療法士が適切な理学療法を提供するためには、単に疾患名に依存した理学療法ではなく、いかに機能障害を評価し、その障害を治療対象とする理学療法に発想を転換することが必要である。我々はこれまでの教育の中で、疾患名から評価項目を抽出し、治療を展開すること、すなわち疾患名ありきでの理学療法を学んできた。しかし、このような思考過程のみでは、理学療法士が最も得意とする対象者の訴えや症状から病態を推測し、仮説に基づき適切な検査法を選択して、対象者に最も適した介入方法を決定していく臨床推論の過程を活かすことができにくい。本シンポジウムでは、変形性膝関節症を例として、理学療法をどうパラダイムシフトするかを運動学・運動力学的データを用いて述べる。